

1 研究の内容

子どもたちがやりたい音楽とは何だろう。そして、異なる背景を持った個が同じ空間で集団として音楽すること、これこそが学校音楽でしか経験することのできない学びの時間なのであろう。一人ひとりの音楽が存在し、繰り返される音楽活動の中で、異なった表現が行き交う空間。だからこそ触発されながらそのカタチを大きくしていく。昨年度まで「音楽すること」からひろがる・深まる」という研究テーマのもと、①「あそぶ・選択する」ことの中から育まれること②様々な楽器や音に出会うことで、個の音楽観の変容を追うこと③自分の音楽とは何か考え表してみることの3点を、子どもの活動を通して多角的に分析してきた。その中で、自分で活動を創っていく時間をたっぷりと設定する中で、子どもたちの音楽的深まりやだけでなくひろがりも期待できることは、明らかになったと言える。自らが自分の意思で音楽と向き合い、自分がやりたい音楽を見つけ、さらなる興味を持つことから深まり、ひろがっていくのである。まずは自分が音楽することを楽しむ。時に仲間とともに創りあげる過程を楽しんだり、悩んだりする中で新しい気づきが生まれ次に活かしていく。このような学びのサイクルこそ、学校音楽における大切な学びであると言いたい。

本校の音楽部の考えは、ニュージーランド出身のクリストファー・スモールが提唱した、「**musicking**」*1 に賛同していくことには変わらないことを初めに伝えておく。長年、本校音楽部では、スモールの考えに賛同し実践を続けてきた。どんな形であれ音楽に主体的に関わっていくことができるからだを育むことを第一に考え、実践をしている。子ども一人ひとりが「音楽すること」を実感し、自らが音楽と向き合いたいと思えるような環境づくり（場の設定や教材の工夫）が大切であることも明らかになってきたところである。その特徴のひとつといえる活動が、4年生から継続して設定している「**MUSIC MAP**」である。この時間においての子どもたちの姿からは実にたくさんの学びをあむ姿が見てとれる。同時に、やらさせる音楽ではなく、自らがやる音楽の時間が保証されている中で、自分なりに活動計画をし、自分や他者の音楽に浸る中で、自分と音楽との向き合い方を更新し続けている子どもたちの姿が多く見られている。今までの実践で、子どもたちの音楽と向き合う姿の変容を分析し直す中で、この実践の価値付けができたと捉えている。子どもたちの音楽に関わる姿勢や変容から省察するだけでなく、音楽をあみ直していく過程こそがメタ認知スキルや社会情意的スキルを育めると捉えることができた。今年度から「やる音楽」という新テーマの元、子どもたちの更なる音楽的な深まりを保証していきたいと考えている。初年度は、自ら音楽活動に関わるような環境設定や材の追究を中心に、子どもの省察も交えながら意味づけていく。以下は、「**musicking**」と「ミュージックマップ」についてである。参照されたい。

○「**musicking**」：スモールは、このミュージッキングを、音楽する (to music) という動詞の、動名詞形であると定義している。「音楽する」とは、どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加することであり、これには演奏することも聴くことも、リハーサルや練習も、パフォーマンスのための素材を提供すること（つまり作曲）も、ダンスも含まれる。とスモールは言う。まとめると、各自の立場を問わずに音楽的なパフォーマンスに加わるすべてのものが、「音楽すること」なのである。チケットの売り子や、掃除係など、裏方まで、その場に集うすべてのものが音楽に参加し、音楽を共有し、音楽に貢献しているという考えである。

○「ミュージックマップ」自分でやりたい音楽に向き合う時間

4年生から6年生では、自分たちで音楽活動を創りあげる「**MUSIC MAP**」の時間がある。この時間は、自分（たち）の音楽を追求する時間と言ってもよい。自分の音楽活動をデザインし、マップを見直す中で、修正をかけることもあれば、さらに深い学びにつながることもある。さらには一人ひとりのマップが、大きな学習材に変化することもあるのだ。1時間の中の学びを、少しずつ形を変えながら次時に活かして活動していることもわかっている。4・5年生では、様々な音や楽器に触れる機会を多く設

ける。その中で、自らが音楽と向き合い、試しながら楽しむ姿が多く、次第に自分のこだわりを見つけていく。6年生になると、楽器の選択の幅も広がり、ドラムやギター、ベースなどに興味を持ち始める子が多数出でてくる。たくさんの選択肢の中から、自らが音楽と向き合い、試行錯誤しながら進めていく姿が多く見られる。次第に自分の追求すべきものと出会い、没頭する姿が多い。また仲間とともに奏でる喜びや、難しさを、その時その場にいる仲間とともに共有し、さらなる活動へとつなげていく姿もある。mapには地図、天体図、星座図、図解、図表といった様々な意味を含んでいる。ミュージックマップを仮に音楽図とするならば、この時間は子ども自身が自分の音楽史を創っていく大切な時間と言い換えることができる。と考える。

MusicMapは年間を通して継続・活動していくものである。この学習の大きな特徴は、活動を自らが設計し、進めていくところにある。従って、扱う楽曲や表現方法も個に委ねられている。また、活動するメンバーも一人から数人のグループと多岐に渡り、集団構成も流動的である。この活動では、子どもが自分で音楽活動を運営していく。様々な音楽が混在する教室空間で、インスピレーションを得て、アイデアを思い描き、行動計画を設計し、進歩について振り返り、自己もしくは他者からのアドバイスを受けとめ、ひとつのタームを完了させていく。調査し、探求し、作品（演奏）を創造し、見直し、修正を繰り返したのちに、完了のタイミングとその成功度のある程度判断する。また、子どもたちは、自分なりの探求の道筋に沿って、学んだことを自分のものにしていく。作品（演奏）に深くかかわり、創造性の拡散的な思考過程と収束的な思考過程を示し、問題に対する解決方法を自立的に発明する。

このような学習の繰り返しから、音楽的要素の習得や表現の自由さを認識し、次なる活動へとつなげている姿が多く見られている。個では味わえない、集団で活動している学校音楽だからこその醍醐味でもある。常に音がある環境で仲間とともに活動することから、自己や作品（演奏）をメタ的に捉える力を自然と身に付けていくと捉えている。同時に、音楽を通して、音楽における認知的スキルと、社会情動的スキルを交錯させながら複合的に習得していくと考えている。

2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

本校のカリキュラムは、帯単元で展開していることが、特徴の一つである。

1・2年生では、からだを使って、音楽することに重点をおいている。特に1年生の入学当初は、幼児教育からのなめらかな接続を目指すべく活動に重点を置いている。その一つが、わらべうたあそびである。子どもたちは、初めて出会う仲間と、手を取り合い、ともに歌い、活動を成立させようとするのである。たった数分でも、子どもたちの中には、様々なことが起き、それを子どもたち同士で解決しようとしていく。「あそぶ」という活動の中に、音楽の授業を位置づけ、音楽的要素も取り入れている。また、歌集「歌はともだち」（教育芸術社）の中から自分で選んだ曲をクラス全体で歌う活動も常時活動に位置づけている。

2・3年生では、和楽器に触れる機会も設け、多様なモノに出会う機会を多く設定している。2年生では、江戸囃子を唱歌から体験し、締太鼓、桶胴太鼓、篠笛とアンサンブルを楽しむ。3年生になると大太鼓や箏との出会いもある。また、ソプラノリコーダーとの出会いもある。自分息がそのまま音となって表れる楽器の一つであり、自分の身体から出てくる息を感じられるよう配慮している。あそびの延長線上に位置するよう、楽曲選択にも配慮している。

4年生から6年生では、自分たちで音楽活動を計画し、実行していく「MUSIC MAP」の時間がある。

以上の活動に加え、一斉活動として器楽演奏（リコーダーを中心とした）や歌唱活動も行う。仲間と息をあわせるおもしろさや心地よさを感じる機会になるだけでなく、音の重なり気づく機会になることも多い。自分で音楽と向き合う時間、集団で一つの音楽を奏でる時間を、音楽フィールドに共生させていることが、自ら音楽に関わること、まさに「やる音楽」につながっていると捉えている。



また、11月に行われる全校音楽会に向けた取り組みにおいて、学年で一つの表現をつくりあげてい

く過程においても、音楽に限らない実に大きな学びあいの時間がある。一人ではできない、集団だからこそ経験できる大きな音楽活動の一つと言えるのではないか。

最後にここ数年の試みとして、ICT 機器を活用できる場の設定をしている。現在の音楽において、五線譜が大きなウェイトを占めていると言っても過言ではないだろう。しかし、この五線譜に壁を感じている子どもは多いのが現実である。五線譜の読譜ができないうちや音楽ができないのかと問われたら答えはノーである。例えば、インターネット上には、様々な楽曲のシンセシア動画がアップロードされている。それらをうまく活用し、自分のやってみたい音楽にアプローチすることもできる。また、実際に表現してみたい楽曲に出会ったとき、実際の演奏動画を視聴し自分の音楽につなげることもできる。ゆっくりではあるが、徐々に自分のものとしていく姿がある。音というカタチにアプローチしていくすべは多様にあるのだ。デジタル社会になった今に生きる子どもたちならではの音楽との向き合い方のひとつなのかもしれない。

(1) からだをつかって音楽する (低学年)

低学年では、からだ全体で活動することを大切にしている。あそぶという活動を通して、様々なことを学んでいく。低学年の時に、からだを通して経験していると、高学年においての多様な音楽を受け入れたり、自分との異なりを受け入れたり、音楽そのものを柔軟に受け入れることが出来るからだに育つのである。

①自分で選んだ曲をみんなで歌う活動 (リクエスト)

授業の始まりは、1グループ(4人)それぞれの子が歌集「歌はともだち」(教育芸術社)の中から歌いたい曲を選び、選んだ理由を発表し、クラスみんなで歌う。子どもたちは、自分の順番が来る日を楽しみに待っている。そして、「今日は、どんな曲が出るのかな。」「多分あの子だから、あの曲だよ。」「やっぱりね。」など、子ども一人ひとりがこの活動の中で、思いを持って参加している姿が多くみられている。活動を重ねるにつれ、その子らしさや選んだ背景までも感じ取ることができるようだ。毎回こだわりを持って曲を選ぶ子もいる。それををわかっている仲間もいる。自分で選ぶという行為には、様々なことが関係していることがみてとれる一場面である。その子自身を受け入れられる関係性が出来ていると言ってもよいだろう。もちろん初めて出会う曲もある。そのような時、友だちの声を聴いて真似たり、楽譜を一生懸命見つめ、時には指で歌集をなぞりながら歌ったりする姿がある。仲間がいるからこそ、成り立つ学びと言えよう。

②あそびを通して関係性が育まれる (わらべうたあそびを中心として)

入学して間もない時期の活動では、初めて出会う仲間と、手を取り合い、楽しそうにあそぶ姿もある一方で、新しい環境への不安を顔に出す子どもも少なくない。いざ一緒にあそび始めると、手をつなぐ安心感もあるのか、すぐに活動に参加できる。仲間とともに、声を合わせ、息を合わせ、うまくあそびが成立したとき、子どもの表情は非常に柔らかく、心地よさがみてとれる。子どもたちにとっては、わらべうたあそびだけがあそびではない。手拍子でのリズム学習や、オスティナートをつけて歌うこと等々、すべての活動が子どもにとってはあそびとしてからだに入っている。

わらべうたあそびでは、クラス全体であそべるものから始め、徐々にグループでのあそびや少人数のあそび、人当てのあそびも取り入れていく。活動を重ねるなかで、息があわなかったり、ルールを守ることができなかつたりなど、当然もめ事も頻発するが、そのときの子どもたちの関わり合いこそが大切であると考え活動を見守っている。同時に、そのような営みの中で葛藤を覚え、折り合いをつけることなどを学んでいるのである。他者がいることを意識する上では、大切な経験と言えるだろう。

2年生でもわらべうたあそびは継続している。あそびを継続する中で、次第に自分たちであそびを変えて楽しむ姿も出てくる。時に、子どもたちは、言葉を変えてあそんだり、フレーズを増やしてあそんだりもする。伝承あそびだからこそ現在の生きる子どもたちにあつたあそびのあり方も見えてきている。時代を超えた伝承あそびとして、変化を楽しみながら活動させたい。

(2) ミュージックマップの時間における学びあい

プロのジャズベーシストである立花氏は、演奏にうまい下手はない、「音楽の時間」で重要なのはコ

コミュニケーションであるという。また、浮々谷は精神医療を専門とする北海道浦河町の浦河ひがし町診療所で行われている「音楽の時間（後の PPE）」に年3回ほど参加し研究を重ねているが、その中で次のように述べている。多くのメンバーが「落ち着いてできればいい、いつも通りできればいい」というように、「今以上うまくしようとは思わない、楽しければいい」ということでほぼ一致している。仮に「うまくなること」を目指すと、楽器の扱いや演奏の技術のハードルが高くなり、うまい人に同調すべきであるという暗黙の圧力も生まれて参加者の「日常」から切り離された活動なりかねない。*2

学校における音楽も同じだと考えてよいと捉えている。自分から向き合っこそ音楽のもつ本当の楽しさが感じられるのではないか。このような場の設定は、教師の役割のひとつでもある。子どもが没頭できゆったりと自分の音楽に浸れる時間こそ、学校で音楽を学習する意味だと捉えた上で、子どもたちの様子を紹介したい。

●自分たちで構成を工夫しながら

Summer（久石譲）に取り組んでいる4人グループがある。ピアノ譜をベースとしてピアノとマリンバでメロディと伴奏を奏でている。練習では、オーケストラ風やコンサート風などと自分たちなりのイメージを表現しようとしている姿がある。また、互いに教えあう姿もありその過程でそれぞれの課題も見えてきているようだ。A児は音の「強弱」に意識を持っている。B児は「速さ」に着目している。それぞれの課題が練習していく中で共通の課題に変化しているのも見てとれる。「ここは少し早くなるから気をつけよう。」「2つのスタッカートと普通の差をはっきりさせよう。」「ここはオクターブでやってみよう。」「マリンバのソロを入れてみよう。」などと、音を介して自分たちの音楽をつくっていく姿がある。たくさん試す中で、互いの思いや考えを交流させオリジナルの表現を追究している姿と言えよう。



●タブレット端末を見ながら習得していく

リコーダーの演奏には、なかなか向き合うことができないC児。ゲーム好きで、ゲーム音楽には興味がある。そして、自分の頭の中にはやりたいゲーム音楽が流れている。その音楽をキーボードで演奏してみたいという思いはあるのだが、楽譜に対して抵抗があるようだ。そこで、タブレット端末を貸し出しシンセシアを見ながらやってみてはどうかと提案した。すると、落ちてくる映像に合わせ少しずつではあるが、鍵盤を押し演奏を始めた。初めはぎこちない指の動きであったが、練習を重ねる毎に次第に自分のものにしていく姿があった。その後C児は他のゲーム音楽にも興味がひろがり、自分から音楽することを楽しんでいるように見てとれる。

3 今後に向けて

新たなテーマを設定して実践研究を始めた今年度。今まで以上に子どもに活動を委ねる場を多く設定してきた。その中で、子ども自身が音楽することを楽しむ姿や他者との協働から新しいものに出会うこともできた。様々な文化を一人ひとりが教室空間に持ち込み、さらには、新たな文化となって個々に蓄積されていく様子も伺えたのである。教師もともに音楽することを楽しみ、自分の文化も子どもとともに蓄積できたと言えよう。一方で、個々の変容をリアルタイムで追うことが難しいことも明らかになりつつあり、この点は継続課題として考えていく。また、新たな子どもの見とり方についても明らかにしていきたい。音楽は社会からなくなるものではない。だからこそ、生活と音楽の関わりや出会いが大切になってくるのだ。「音楽の授業が好きだ」と思えるような子どもたちを育てたいという考えを根底に置き、この先も多角的に追究していきたいと考える。また、学校という場で音楽こそ今必要なのであると声を大きくして言っていくと同時にそれを価値づけられるよう研究を進めていく。

（下田・町田）

*1 クリストファー・スモール、野澤豊一+西島千尋訳（2011）『ミュージッキング』水声社

*2 野澤豊一・川瀬慈編著（2021）『音楽の未明からの思考 ミュージッキングを超えて』アルテスパブリッシング,p60,63

参考文献：OECD 教育研究革新センター、西村美由紀訳（2023）『創造性と批判的思考 学校で教えるべきことの意味はなにか』明石書店